

亡妻王氏墓志銘

蘇軾

蘇軾はだれにでも心のやさしい人であったと思われる。弟の蘇轍に対する友愛は、それを示すが、妻に対しても、惜しみなき愛情を分け与える人であった。その愛の文章をここにあげよう。そこには、妻ばかりでなく、父母への親愛の情もあらわれていて、蘇東坡の家庭のあたたかさがわれわれにつたわって来る。

治平三年（一〇六六）、数え年三十一歳の作。

治平二年五月丁亥、趙郡の蘇軾の妻王氏、京師に卒す。六月甲午、京城の西に殯し、その明年六月壬午、眉の東北彭山県安鎮郷可竜里なる先君先夫人の墓の西北八歩に葬むる。

【語釈】丁亥の日…五月二十八日 西暦では一〇六五年。○趙郡…蘇軾の祖先の出身地。○王氏…妻の姓。○甲午…六月六日。○殯…埋葬に至るまで仮りに柩を安置しておくこと。○葬…埋葬。

【通訳】治平二年五月丁亥の日、趙郡の蘇軾の妻王氏が、みやこでなくなった。六月甲午の日、みやこの西にもがりし、あくる年六月壬午の日、眉州の東北彭山県安鎮郷可竜里の父母の墓の西北八歩のところに埋葬した。

軾その墓に銘して曰わく、「君諱は弗、眉の青神の人、郷貢の進士方の女、生まれて十有六年にして、軾に帰ぐ。子の邁有り。」

【語釈】○郷貢の進士…州や県から中央政府の官吏任用試験の進士科に推薦されたもの。

【通訳】わたし蘇軾がその墓に銘を書く。それはこうである。

妻の名は弗、眉州の青神県の人。郷貢の進士である王方のむすめ、年十六歳で、蘇軾にとつぐ。子に蘇邁がある。

（注）東坡は、後妻としてこの王弗の従妹、王閏之（一〇四八～一〇九三）をめとっている。

君の未だ嫁せざるときは、父母に事え、既に嫁しては、吾が先君先夫人に

事え、皆謹肅を以て聞こゆ。その始め未だ嘗つて自ずからその書を知るを言わざりき。軾の書を読むを見れば、則ち終日去らざるも、亦その能く通ずるを知らざるなり。その後軾忘るる所有れば、君軾能くこれを記す。その他の書を問えば、則ち皆略ぼこれを知る。是れより始めてその敏にして静なるを知るなり。

【語釈】○謹肅：謹は謹嚴、肅は嚴肅と熟するようにつつしみ深く几帳面なことをいう。○敏：頭の回転の早さを持ちながら、静：清潔でおとなしい、という、兼ねがたい二つの美徳をそなえていた人であった。

【通訳】妻がまだ結婚していないときは、父母につかえ、結婚してからは、わたしの父母につかえ、どちらもつつしみ深いという評判であった。さいしよは、妻は自分で文字ないし書物を知っていることをいわなかった。わたしが書物を読んでいるのを見ると、一日中そこをはなれない。それでもわたしは妻が書物を理解できるといふことを知らなかったのである。そののち、わたしが書物のどこかを忘れると、妻はいつもそれをよく記憶していた。そのほかの書物のことをたずねると、みな大体のことは知っている。それからやつと妻がするどい頭の持ち主でありながら、しとやかでだまっていたのだということを知ったのである。

軾の鳳翔に官するに従う。軾外に為す所有れば、君未だ嘗つてその詳を問ひ知らずんばあらずして曰わく、『子、親を去ること遠し。以て慎しまざるべからず』と。日ごとに先君の軾を戒しむる所以の者を以て相語れり。軾客と外に言え、君屏間に立ちてこれを聴き、退けば必ずその言を反覆して曰わく、『某人や言え、軾ち両端を持し、惟だ子の意の嚮う所のままにす。子何ぞ是の人と言うを用いん』と。来たつて軾と親厚せんことを求むること甚しき者有り。君曰わく、『恐らくは久しきこと能わざらん。その人に与すること鋭ければ、その人の去ること必ず速やかなり』と。已にして果たして然り。

【語釈】○両端を持す：どちらでも、都合のよい方につけるように形勢をうかがっていること。このようにいいなりになる人間は、あてにならぬから、つきあうなど、王氏はいうのである。○何ぞ用いん：そうする必要があろうか、不用だ、need not の意である。

【通訳】わたしが鳳翔の簽書判官として赴任するのに同行した。わたしが外でなにかにして来ると、妻はいつも詳細を聞き知ろうとした。そしてこういうのである。「あなたは、親から離れて遠いところに来ていらっしやいます。なにごともしも慎重にせねばなりません。」こういって、毎日、父がわたしを訓戒したことばをかたって聞かせるのであった。

△東坡は、決して品行方正という人ではなかったらしく思われるから、こういう戒しめが必要でもあったのであろう。「子、親を去ること遠し」ということばは、「論語」里仁篇の「父母在せば、遠く遊ばず」をふまえて、本来父母を離れて遠く遊ぶべきでない蘇軾であるからこそ、いっそうその慎重さを望んだものであろう。こうした、本来なら、女房のうるさい世話焼きも、なくなつたあとでは、賢夫人としての思い出としてのこるのであった。そのほかに、鳳翔の思い出がまだまだある。▽

著者 清水茂氏見解

わたしが来客とおもてぎしきではなしをしていると、妻はつい立てのあいだに立って、それに耳をすまし、わたしがおくへはいると、きつと、来客とのなしをくりかえして、こういったものである。

「だれそれは、なにかいうといつてもどちらにでもつくことができるようにし、ただあなたの意向のとおりにあいづちを打っていらっしやる。あなた、こんな人とはなしあうことはいりません。」

わたしと親しくしようと、とても熱心にやって来た人があった。妻は、「多分長持ちはしませんよ。ともだちになろうと熱心になる人は、人からはなれるのもきつと急です。」そういううちに、予想どおりそうであった。

(中国の習慣では、よほど親しくないかぎり、妻は来客とあわないから、ものかげで聞いていて、その人の人物評をすることになる。なおこのような地方の役所では官庁と官舎がいっしょになっているから、政治方面のはなしも、おくの方の官舎で聞き知ることができたわけである。)

將に死なんとする歳、その言聴くべきこと多く、識有る者に類す。その死するや、蓋し年二十有七のみ。始めて死するや、先君、軾に命じて曰く、

『婦は汝に艱難に従う。忘るべからざるなり。他日汝必ずこれをその姑の側に葬れ』と。未だ期年ならずして、先君没し、軾謹しんで遺令を以てこれを葬むる』と。

【通訳】人は、死ぬまえに、その人のよさをいちばんよくあらわす。「論語」泰伯篇に、曾子が「人の将に死なんとするや、その言や善し」というとおりである。

死んだ年には、妻のことばに聴き従うべきものが多く、見識ある人のことばのようであった。死んだとき、わずか二十七歳であった。彼女がなくなつたばかりのとき、父はわたしに命令された。「よめは苦しい生活の中を、おまえにつかえて来た。忘れてはならないぞ。いつか、おまえはきつとこのよめをそのしゅうとめのそばに埋葬するんだよ。」

それから一年たたぬうちに、父もなくなった。わたしは、うやうやしく父の遺言にしたがって、妻を葬むるのである。

ここまでも、「銘して」書かれた文であるが、もういちど「銘」とことわって、全体をしめくくる。いままでが、事実を述べた比較的客観的な文字であるのに対し、ここでは、自分の感情をぶちまけた感傷の句をつらねる。

銘に曰く「君は先夫人に九原に従うを得るも、余は能わず。嗚呼哀しいかな。余は永く依怙する所無し。君は没すと雖もそれ与に婦と為る有り。何ぞ傷まんや。嗚呼哀しいかな。」

【語釈】○九原…古代の晋の国の墓地。鄭玄の注に、「晋の（国の）卿大夫の墓地は九原に在り」とある。それから、転用されて、墓のことを「九原」というようになった。○依怙する所無し…「詩経」小雅蓼莪篇の「父無ければ何をか怙まん。母無ければ何をか恃まん」の句から、父母のないことをいう。

○何ぞ傷まんや…感傷を否定しておきながら、さいごに、「嗚呼哀哉」というところに、ただの常套語としてでなく、無限の感慨がこめられているように思われる。

その銘に、妻はあの世で母のそばにつかえる。わたしはできない。ああ かなしいかな。わたしは永遠にたよるべき父母がない。妻は死んでしまっても父母のよめとなつている。傷ましいことはない。ああ かなしいかな。」